
女神（ファイアーエムブレムのファンフィクション）

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエムブレムのファンフィクション
女神

【Nコード】

N6586H

【作者名】

y

【あらすじ】

アカネイア大陸最強の軍事大国、マケドニア王国。この国は遙か昔ドルーア帝国が開拓地に送り込んだ一人の奴隷によって建国された。その勇者の名はアイオテ。彼は女神アルテナの力を授かり、人間を獣として扱う帝国に反発し、自由を求め反乱を起こす

マケドニア王国教書（前書き）

任天堂SFC版『ファイアーエムブレム』のファンフィクションです。所々にオリジナル描写が入ります

マケドニア王国教書

> i 2 3 7 1 — 3 2 2 <

「マケドニア王国成立の歴史、及び創世神話との関連性」

このアカネイア大陸で最大の軍事力を有する戦闘国家マケドニア王国は、元々はドルーア帝国が開拓地を開くために労働力として送り込んだ奴隷の一人、アイオテが打ち立てた王国です。過酷な労働、劣悪な環境、先住民族であった火の部族との争いなどによって多くの奴隷が命を落としました。そしてそのような陰惨な状況に耐え切れなくなったアイオテという一人の若者が、一匹の飛竜に跨り、強大なドルーア帝国に独立戦争を挑んだのです。アイオテは深い洞窟がある樹海で約一年にわたり強大な竜にゲリラ戦を繰り返しました。木々が密集する狭い森の中では竜の巨大な体は邪魔になり、恐ろしい炎は周囲の木々に燃え移り逆に自らの体を焼く尽くしてしまいました。その結果奴隷たちの独立軍は、これ以上戦っても被害が広がるだけだと判断したドルーア帝国からの自由を勝ち取ったのです。またその頃、ドルーア帝国内で出生率が急激に下がり政情が混乱し、国力が低下している時期でもあったので、そのことも奴隷たちの独立を認める大きな要因になったのかもしれませんが

こうして独立を勝ち取った奴隷たちは自由を叫び、奴隷を纏めて反乱を起こすよう呼びかけ導いた奴隷戦士アイオテを初代国王としてマケドニア王国を建国しました。アイオテには不思議な力があり、マケドニア地方に生息する野生の飛竜を手なずけることができました。その方法は代々マケドニア王族に秘伝の王術として伝わっているようです

こうしてマケドニア王国には竜騎士^{ドラゴンナイト}が誕生しました。マケドニア王国は竜騎士の戦闘力を背景に軍備を拡張し、現在の大陸最強といわれる戦闘国家を作り上げたのです。また、奴隷自身が開拓した肥沃な大地はその戦闘国家をますます強大なものとし、アカネイア聖王国をも恐れさせる脅威となりました

「マケドニア神話 奴隷戦士アイオテ 自由への目覚め」

奴隷戦士アイオテの反乱、これは実際にあったことです。しかし多くの戦術専門家は如何に強大な竜に不利な地形でゲリラ戦を繰り返したとはいえ、人間であるアイオテ等奴隷には、継続して竜を打ち倒せる可能性は低かったと分析しています。また、竜族の中でも最も防御力が低い飛竜の皮膚にさえ、銀の剣でなければ傷一つ付けられないという事実は、開拓用の斧や森を切り開く鉄の剣で反乱を起こした奴隷たちに何らかの外部の力が加わったという説が有力です。この「外部の力」というものが、マケドニア地方に古くから伝わる女神アルテナ信仰です

女神アルテナ、という名はマケドニアが国の形になる以前からその地方に伝わっていた古い民俗信仰で、大地のエネルギーを象徴する女神として信じられていた地母神の名前です

次章からは、その女神アルテナ神話を抜粋して記述します

慟哭

アイオテは何処の出身であるのか……はつきりとした確証はないが、黒髪黒瞳の容貌からドルーア帝国に占領された南国の王子であったという説もある。実弟テオと共にこのドルーア帝国最北端の開拓地に奴隷として送り込まれ、過酷な労働に耐えていた。しかし、その過酷さに風土病に倒れた弟を奴隷小屋に残し、アイオテ等開拓民は広大な森を切り開いていた時、深い洞窟を発見し探索していた

……しかし途中火薬でも壊れない石の壁を発見したのだった

「これは一体何なんだ？発破でも傷一つ、つかないなんて……」

「おい……？ここになんかあるぜ……？」

石壁の中央には大きな紅い宝石が埋め込まれていた

「紅玉^{ルビ}じゃねえのか……？おいナイフ貸せよ、取り出そうぜ……」

「
アイオテはどのように宝石が埋め込まれているかを探ろうとそれに触れた

……ダレダ……名ヲ……ナノレ……」

「うわっ……！」

どうしたんだ？と駆け寄る仲間たちに、アイオテは周囲を見回しながら慌てて尋ねた

「おっ……お前等聞こえねえのか？変な……声が……頭に響いて……」

……我が大地は悲鳴を上げている……我には受肉体が必要だ……」

「何抜かしてんだアイオテ？何も聞こえねえよ」

・・・我が問いに答えられれば・・・貴様に力を・・・授けよう・・・

「俺にしか・・・聞こえねえのか・・・？」

不思議な声は、その血のように紅い紅玉ルビーから聞こえるようだった。それに触れているアイオテの頭の中にだけ響いてくる。彼はひどく気味が悪くなった

「い・・・行こうぜ。発破でも砕けねえんじゃ、俺等の手には負えねえよ」

そう、不審がる仲間等に告げ立ち上がる。仲間を促しながらアイオテはその場を離れた

アイオテが洞窟から戻り、食事を終えた頃は既に夕闇が迫っていた。荒涼と煤けた開拓地は沈みかかる夕焼けの橙色に染まっている。未開拓の樹海を見渡せる崖の上に奴隷たちの小屋はあった。小屋で臥せっている弟の為に懐に硬いパンを隠し歩いていると・・・小屋の前に人だかりが見えた。何かあったのかとアイオテは走り出す

「アイオテ！テオが・・・！」

仲間たちの怒りとも悲しみとも取れる表情。まさか・・・とアイオテはその人だかりを掻き分けた

「・・・！！」

そこには腕が奇妙な方向に曲がり、喉に大きな穴が開いている無残な弟の姿が横たえてあった。喉からの血はまだ渴ききつておらず・・・まるで黒い蛇が這い出しているように見えた・・・アイオテは力なく地面に膝をつく

「ドルーアの監視官がお前が仕事に行った後来て・・・病気を治してやるってテオを連れて行ったんだ。俺はテオの熱を冷やしてやるうと思つて川の水を汲みに行つて戻つて・・・それを見ていたんだ・・・

止めなかったんだ・・・ゆ・・・許してくれ！アイオテ！」

片腕が肘の部分から喪失している奴隷の一人がそう叫ぶ

「・・・おまえ・・・の、せいじゃ・・・ねえよ・・・」

「アイオテ！！あいつらお前を目の敵にしてやがるんだ！テオを休ませる時お前が監視官に喰ってかかってたから・・・」

確かにアイオテは病気の弟にさえ過酷な開拓労働に向かわせようとするドルーア帝国の監視官をその日の朝やり込めた。フラフラしてる奴に火薬の調査を間違えられたら開拓に多大な被害を被る。そうしたら一番困るのはアンタ達じゃねえのか？と・・・アイオテはその壮健な体躯、度胸、行動力に加え、機転の利くその明晰な頭脳はドルーア帝国の奴隷支配政策に於いて危惧を感じさせるには充分であつた。しかし現場で奴隷たちを一番まとめられるのは彼であり、彼の周りにはいつも奴隷たちが集まっていた。監視官はそんな不思議なカリスマ性を持つアイオテを扱いかね、常に一番危険な開拓作業地に向かわせていた。作業を成功させれば良し、失敗し発破で死のうが原住民に殺されようがよし。使えるだけ使って切り捨てる腹積もりであつたのだ

「それなら何故俺を直接殺さない！病の身のテオが・・・こんな・・・惨い仕打ちを受けなければならぬ程の・・・どんな理由があるってんだッ！」

不意に、怒りに震えるアイオテ等奴隷達の背後から高慢な声が響く
「その者は既に開拓作業を行うことは不可能だ。そんな奴隷にタダ飯を食わせる訳にはいかぬ。その分を貴様等に回してやろうと思つたのだ。たかだか奴隷の分際の貴様等にこんな寛大な配慮するのはワシ位のものだ。感謝するべきであろう？」

十名程度の兵士を背後に、ドルーア帝国監視官は野卑な口髭を撫で、
アイオテ達にゆつくりと近づきながら嘲るように言つた

「・・・てめエ！」

アイオテは自分達をまるでモノのように言うその余りに屈辱的な言葉に逆上した。自分たちは意志を持ち、生きている一人の人間なの

に――！

「逆らうか！丁度良い・・・殺せ！」

パンを切る小さなナイフ一本で向かってくるアイオテを見、不敵に笑うと監視官は背後の兵士たちに号令を発した。その瞬間兵士たち一人一人が巨大な火竜へと変幻していった

「うわああああッ！」

ゴッ！という音を発して火竜がアイオテに炎を放った。アイオテは咄嗟に横へ飛んだが肩口を焼かれ叫び声を上げ、地面に倒れ込んだ。苦しむアイオテに他火竜の炎が襲って来る

「アイオテ！逃げろオ！」

――ドン！

肩口を覆う焼け付くような鈍痛に耐えていたアイオテを突き飛ばしたのは仲間の奴隷だった。その男は全身を炎に包まれ、周囲にいた他奴隷たちも滅茶苦茶に火竜に体当たりを始めた。ウオオオオオ・・・という凄まじい怒号が煤けた大地に響く

「――やめろオ！テメエら死ぬ気か？！」

「早く逃げろ！俺たちだってお前と同じ気持ちだ！妻や子を目の前で殺されこんな所で獣のように働かされ――」

玉砕の体当たりを繰り返す奴隷たちは次々と堰を切ったように叫び出す

「死は奴隷にとって――解放でしかない！そんなのは人間じゃねえ！」

それは受難の苦境に押し潰された彼らの、魂の叫びだった

「・・・お前・・・が・・・俺たちを・・・人間に戻してくれ・・・一番最初に・・・あいつらに刃向かった・・・おまえこそ　　が　　アイオテを突き飛ばした男はそう言ったきり、絶命した

「お・・・俺一人で逃げれるわけ・・・」

一人の男がアイオテに再度体当たりをし、小屋側面に面している崖に突き落とした。崖下に落ちていくアイオテは落下の恐怖も忘れ崖上を見上げ必死に手を伸ばし叫ぶ。仲間たちの名を――奴隷たち

は殆どが炎に包まれ、最期の叫び声を上げながらも崖口に壁を作るように仁王立ちしている。彼らは互いの体を支え合いながら器官が止まるまでただ、叫び続ける

絶望の叫び声の中、祈りのような言葉をアイオテは確かに聞いた

「はやく・・・いけ・・・」

「アイ・・・オテ・・・おれたちに・・・自由・・・を・・・」

「人間に・・・戻して・・・くれ」

――――――――――慟哭！

地母神

アイオテは肩の痛みも忘れただ走り続ける――

顔は泥と血に塗れ、裸足の足には密集する木々に引つ搔けたのか血が流れ続けていた

「うわっ・・・」

何かに足を取られ、アイオテは顔から倒れた。その痛みには彼は自分が夜の森の中にいることを、そして辺りが濃い霧に覆われていることにやっと気づいた――自分は崖から落ち、幸運にも柔らかい苔の上にも落ちたのか、所々打撲の鈍い痛みはあるが致命的な骨折などは無かったようだった

「――ここは・・・どこだ・・・？」

濃い霧に覆われている森の中は驚くほど静かだ。霧というより霧雨かもしれない。アイオテの体はぐつしよりと濡れているにも関わらず寒さは感じなかった。寒さよりも自分を庇ってくれた仲間を置き去りにして逃げ出した自分に怒りが湧き上がる。燻る肩の熱さよりも熱い、怒り

「俺は・・・最低だ・・・最低の卑怯者だ・・・あいつらを・・・見捨てて・・・」

――グルルル・・・

自責の念に苛まれていたアイオテはふと、周囲に獣の気配を感じた
「俺の血の臭いに集まってきたのか・・・」

獣は狼だった。霧と暗さに隠れてはつきりとした姿は見えないが、百以上の紅い瞳がアイオテを囲んでいる

「こんな卑怯者の肉はさぞかし不味いと思うぜ・・・それでもいいなら勝手に食えよ・・・」

アイオテは抵抗する気が全く起きなかった。仲間を置き去りにした罪悪感、またあの恐ろしい火竜には自分たち人間の力ではいくら力

を合わせても勝てないことを思い知らされた絶望感……その二つの心の痛みから全てを諦め、仰向けに身を倒した彼の前に一匹の狼が近づいてきた

「……すまねえ……みんな……せっかく俺を庇ってくれたのに、俺にはあいつらを叩きのめせる力なんざねえんだ　よ……今……お前等の所に……行くぜ……」

アイオテは静かに瞳を閉じた……が

「チ、カ、ラ、ガ、ホ、シ、イ、カ」

「……え?!とアイオテは瞳を開く。今……微かに女の声が聞こえたのだ

「オ、マ、エ、ハ、チ、カ、ラ、ガ、ホ、シ、イ、ノ、ダ、ロ、ウ」その澄んだ声は、なんと自分を見下ろしている狼の口から聞こえてくるのだ

「なっ……!なんだ?なんで狼が喋ってんだ?俺はもう死んで地獄にでもいるのか?」

狼が喋るなんて……アイオテは混乱しきっていた。考えられるのは、此処が先程まで居た世界ではないということ……地獄ではないかということ

「コ、タ、エ、ロ」

澄んだ女の声は再度問う。力が欲しいかだと?答えてやろうじゃねえか!例えこの狼が地獄の悪魔だとしても、アイオテの答えは決まっている

「欲しいに決まってるだろうが!あのクソ竜野朗どもを……いや!俺たちが自由を勝ち取れる力を!人間に戻れることが出来る力が欲しいんだ!」

「デ、ハ、ツ、イ、テ、コ、イ」

そう……狼は身を翻し歩き出した。他の狼たちもそれに続く。ザッザッ……という草を踏む音だけが響く静寂の樹海。アイオテは一瞬の逡巡の後……すぐに歩き出した

……悪魔なら悪魔でもいい。本当にそんな力が手に入るならば――

- -
こんな狂気のような状況に適応しようとしている自分の神経をアイオテは自嘲の笑みを浮かべた。自分の感覚も既に麻痺しているのだろうか・・・余りにも色々なことがありすぎたから・・・

狼たちが、止まった

「ここは・・・？昼間の洞窟じゃねえか？」

全ての狼達が視線を向けているそこは、確かにアイオテが昼間妙な声を聞いたあの洞窟の入口だった。ということは此処は地獄ではない・・・現実だ

「力、ミ、ガ、オ、マ、チ、ダ」

アイオテを奥へと促すように首を振った後、狼は何も喋らなくなった
「神がお待ちだと？この奥に神様がいるってえのかよ？」

もう完全に沈黙し首を垂れているだけの狼たちに舌打ちをして、仕方なくアイオテは奥へと進む・・・真つ暗だ。ゴツゴツとした岩肌だけが、出口から微かに入り込む霧光に照らされて見えるだけの

「ここからはもう・・・進めねえ・・・この壁の向こうにいるのか・・・？」

発破でさえも崩れなかった、あの紅い宝石が埋め込まれた石壁の前にアイオテは着き途方にくれる。どうしたものかと思案にくれていると・・・またあの不思議な声が頭に直接響いてきた

・・・名を名乗れ・・・

先程と同じ澄んだ高い声だ。女。気味の悪さを感じながらもアイオテは壁に向かって叫んだ

「テメエが・・・神かつ？俺の名はアイオテ！ドルーア帝国の開拓奴隷だ！テメエは一体誰なんだ？本当に神なのか？！」

・・・我が名は地母神アルテナ。この大地を守る使命を持つ意識体なり・・・

「なっ・・・何がなんだか分からねえがっ・・・意識体？神様じゃねえのか？」

――大地のエネルギーが結晶となった象徴こそが我が名――
「だから一体何なんだよ？とにかく俺に力をくれ！俺たちが自由を勝ち取れる力を！人間に返ることができる力を！」

――よいか、よく聞け、人間よ。この世界は様々な形を持つ石が複雑に組み合わさって出来ているこの壁のようなものである。長い年月で少量ずつ磨耗し、消滅して行くもの……それが万物の原理であり、この世界を構成する唯一の原則なのだ――

「……わ……分かりやすく言えば！俺は余りアタマよくねえんだよ！」

――しかし今その消滅が余りにも急速に進みすぎておる。
お主等人間が性急に森を開き、川を堰き止め、大地を掘り返していることによって。消滅の原理もまた構成原則の一部ということをお忘れ――

「ちよつと待て！俺たちは好きでやってんじゃねえんだよ！ドルーアの奴等に無理矢理……」

――分かつておる。お主等人間に罪は無い。あの竜族共は昔からそうであった。原則を忘れ身の程を忘れ……如何に発達した種族であろうと傲慢にも自然原則を侵す者には罪が、種の終焉が与えられるのだ。しかしその終焉には長い時がかかる。それを待つてはおれぬ。この大地が修復不能に陥る前に我は原則を破る者共を排除せねばならぬ使命を持つ存在であるのだ。それだけが我の存在理由なのだ――

アイオテには何となく理解が及んできた。ドルーア帝国は多くの国を占領し、世界を支配する為の開拓を推し進めている。それは自然を破壊し、歪ませ、根本から造り変える摂理に反したものだ。この女の声は言っているのだ。その代償が種の終焉、つまり子供が生まれなくなっているという意味であろうと

――しかし我はこの三次元の世界に存在することは不可能な為、我が意識を受け止める肉体が必要である。その器をずっと探していたのだ――

「じゃ、じゃあ俺を！」

アイオテは叫ぶ。この恐ろしい神？の力を手に入れられれば竜を打ち倒せる、仲間の敵を打つことができる、自由を

- - - 我が力は人を超えたもの。未熟な、完成しきるといふ事の無い人間という器には持つてはならぬ力である。強靱な精神を持ち、我と同じ目的を真に持つ者でなければその者の精神や器官の一部を壊すだけのものとなるう。器から溢れた力はマイナスにしか働かぬ

- - - 「俺を使ってくれ！」

原則だの、大地だのは正直よく分からないがドルーアの竜共を倒したいという望みは自分も全く同じだ。受け止めるということはこの得体の知れない女に自分の意識を乗っ取られるということであろうか？自分は心を破壊されるのであろうか？アイオテは強く恐怖を感じたが仲間の最期の断末魔の願い、心底からの願いを叶えるための力が手に入るならば

人間に戻るためならば

- - - 最後にお主に問う。目的を遂行し、人間としての自由を取り戻す願いが叶ったらお主はどうする？どのように生きるのか？ - - - アイオテは口を開こうとし - - - ぐつと答えに詰まった。自由になったら？一体どうするのか - - - ? 主人の命令に従うことだけが生きる意味である奴隷の心理に答えは浮かばない。自由を手に入れることが最終目的で、その後のことなど考えたことすらなかった

「おれ、は・・・」

アイオテの脳裏に無残に殺された弟テオの蛇のような赤黒い血と、赤い炎に巻かれて祈りという叫びを続けた仲間の姿が強烈に浮かび上がる。そして - - - 自分の国がドルーア帝国の侵攻を受けたあの日、逃げ惑う血塗れの父母、親しい人々、名も知らぬ大勢の人々が浮かび上がる - - - 生き残った者たちは「死」のみが許された奴隷に、人間であることすら許されない獣と成り果てた

「俺は・・・その日をただ生き延びるモノになるんじゃないぞ！獣

になることが当たり前のこの世界を変えるために生き延びる！」

「あの竜共が在る限り、いや・・・争いがある限り獣は増え続けるであろう。競争原理は意志あるモノの本質。競争という原理を変えることなど、お主一人如きに・・・いや、神にさえも不可能なと・・・」

「俺一人っていつ言った？！人に戻りたい獣たちのその力を集めて・・・国を作るんだ！」

国、という概念は自然に口に出た言葉だった。俺は今何を言った？アイオテは自分如きの大それたその言葉に一瞬呆然とする

「国とは大地を所有するのみでは非ず・・・」

壁に埋め込まれていた紅い宝石が、ピシ・・・という音と共にゆっくりと抜け出てアイオテの前に浮かぶ

「・・・其処に存在する全ての生きとし生けるものを大地として成るものも・・・」

拳大の紅い石は何故か身動きができないアイオテの胸にズブズブと侵入してくる。しかし何故か痛みは感じなかった

「・・・今ここに一つの契約が成された・・・」

アイオテの体に侵入した紅い石から炎が体中に広がっていく。そこで初めて痛覚が全身を覆い叫び声を上げる彼がその熱さと衝撃に気を失う寸前に・・・長い紅い髪の美しい女が視界に感じられた

「・・・我が名は地母神アルテナ・・・」

反乱決意

星すら見えない群青色の夜空の下、奴隷小屋の前では黒焦げになった死体が幾つも並び、その横では100人もの奴隷たちが墓穴を掘っていた。身を切るような冷気に吐く息は白い。大地は所々焦げ、緑は消し炭のようにボロボロになっていた

「こんな所に埋めちまうが許してくれよ・・・せめて故郷に戻してやりてえが・・・」

アイオテを庇った男たちを、その形骸が分からなくなるほどに燃やし尽くし、監視官は笑いながら去っていった。死体はそのままにしておけという監視官に奴隷たちはせめて大地に戻してやりたい、と懇願したのだ

「・・・アイオテは・・・どうなったんだ・・・？」

「・・・追っていった飛竜どもは戻ってきてたぜ・・・」

「・・・そう、か・・・」

男たちは最悪の結果を想像していた。自分たち誰もが認めるあの勇者さえ――無駄死にだった

「俺たちは・・・ずっと・・・このまま・・・」

「獣のままで死んで満足か!？」

頭上から男の声が響いた

「自由になりたくないのか!人間に戻りたくはないのか!」

絶望感に覆われていた奴隷達は声がした方向を見上げた。そこには――紅髪紅瞳の逞しい男が、一匹の巨大な紅い飛竜に跨っていた

「ア・・・アイオテ?」

奴隷たちは目を疑った。死んだと思っていた勇者が夜空に浮かんでいたのだから。絶望の群青の夜空を切り裂くような炎の色を発してそれ以上の熱い叫びを発して

「お前・・・生きていたのか・・・それにその髪と瞳の色・・・?」

「目を覚ませてめえら!俺たちは何だ?人間だろうが!死ぬことだ

「けが許された奴隷なんかじゃ・・・獣なんかじゃねえ！」

アイオテの変化した髪と瞳が炎のように燃え上がり、呆然としていた奴隷たちの体に空気を伝わり伝染していく。夜露に湿った空気を燃え上がらせ、その場の諦観の空気が燃え上がっていく

―――獣であることを強制された哀れなる者達よ―――

奴隸たちの頭の中に女の澄んだ声が響き始めた。その声は確かにアイオテの口から発せられ、耳に届く声は男のものであるというのに、頭に響いてくる声は確かに女の声なのだ。アイオテの低い声と女の澄んだ声が同時に空気を振動させ、反響し合い、奴隸たちは次第に感覚が無くなっていく

――意志あるヒトに戻るため！立ち上がるのだ！――

才才才才才才才才才才才 - - - - ! ! ! ! !

奴隷達――いや、人間の男たちの声が回帰へのシュプレヒコールとなつてその場を包む。まるで――大地が振動しているようであつた

思慕

あのシュプレヒコールから一年、数百人からなる奴隷であった男たち――反乱戦士達は、あの宝石があった洞窟に立て籠もり、反乱鎮圧の為に送り込まれて来たドルーア帝国火竜軍にゲリラ戦を繰り返していた。宝石が埋まっていた硬い壁は自然に崩れ、その奥はこの樹海全体に通じる地下道となっていた。アイオテは何処からか竜の皮膚を切り裂く剣を手に入れてきて仲間たちにそれを与え、更に何頭の飛竜を戦力として連れてきた。低空からの飛竜の炎を援護と盾にし、そしてその剣を得た反乱戦士たちは何百もの地下道の出口から神出鬼没に現れ、背後から火竜を打ち倒していった。食料は何故か原住民である火の部族が無言で洞窟の出口に置いていった。負傷をした者はアイオテの手が触れるだけで治癒していった――不思議は絶え間なく起こり続けていたのだ。反乱戦士たちはその不思議を背景に、僅かながらも攻勢であった

「アイオテ、一体どういうことなんだ？なんでお前そんな・・・不思議な力があるんだよ？」

「それに俺たちを見れば殺そうとして来た原住民共が何で協力してくれるんだよ？」

仲間たちはアイオテが不思議を起こす度、問うた

「女神アルテナ様が俺に力を授けて下さったのさ」

さらりとそう答えるアイオテを通常は狂人と思うかもしれない。しかしあの反乱を決意した日に聞いた彼の不思議は、戦士達を納得させる

「そつか・・・女神様がついてるんなら俺たち勝てるよな？！」

「なあアイオテよオ、その女神様は美人かい？」

「ああ、ぞっとする位綺麗な女さ」

「バツ力かテメエ！女神様は絶世の美女って昔っから相場が決まっ

てんだろが！」

ハハハハ・・・と笑い声が暗い洞窟の中に響く。この一年の間毎日毎日泥と竜の体液、そして仲間や自らの血に塗れて・・・暗く陰惨な、明日どうなるか分からない戦いを繰り返している疲れ切った戦士たちにとつて、アイオテの口から出るその女神の名は絶望や諦観という感情を払拭してくれる唯一の言葉だった

「さてと、そろそろ寝ようぜ。見張りはちゃんと交替しろよ。疲労はなるべく残すな。まあ此処が発見されるようなことは無いから安心しろよ。あ、明日は南西の出口付近に火竜が二三体来るぜ。武器を点検して夜の内に別働隊は移動しとけ。俺も朝になったら向かうからな」

また、アイオテの不思議な予知だった。この一年正確な敵の襲来時期、戦力を予測する不思議な彼の予知に反乱軍は何度も救われていた。その事実もまた彼らがアイオテを狂人と思わない一因なのかもしれないなかった

「アルテナ、出て来いよ」

洞窟の再奥、荒い布で仕切られた自らのスペースで一人になるとアイオテは胸に埋め込まれた紅玉ルビーに触れた・・・すると彼の目の前にゆらゆらとした炎が現れそれはヒトの形になり、女の曲線が出来上がってゆく・・・

「なんだ？何用か？」

周囲の炎に温度は無い。幻のようなものだった。それは身の丈ほどの長い紅い髪となり、そこに美しい女性の姿が現れる。肌は透き通るように白く、唇は濡れたように紅く光る、鋭く大きな紅い瞳が印象的な美女だった

「さっき教えてくれた明日の火竜の攻撃、仲間に伝えといたぜ・・・いや、別に用って程じゃねえんだ・・・ただ・・・俺が少しその、お前と話したかっただけだよ」

アイオテの不思議は、全て女神アルテナが彼の肉体を通して行つて

きたものであったのだ

「そうか・・・我もお主と語り合うのは嫌いではないぞ。だがお主の仲間にこの場を見られれば、お主は独り言をブツブツと呟く狂人であるな」

「お前は俺以外には見えねえし、声も聞こえねえからな・・・まあなんと思われようといいさ。それに他の奴等にお前みてえな綺麗な女を見せるなんざもつたいねえつてもんよ」

ハハハと声も無く微笑み合う。あの紅い石が埋め込まれ、意識を失ったアイオテが目を覚ました時真つ先に入っただのは長い睫に覆われた大きな紅い瞳だった。自らの体の変化や、体に入り込んだヒトではないその女に当初は恐怖を感じた彼であつたが、この一年自分の進む道を正確に導き、常に正しい情報を与え、時に気弱になりそうな自分を厳しく正しい言葉で叱咤し続けてくれる女神と名乗る得体の知れないその女に・・・アイオテは愛情を感じ始めている自分に気づいていた

「ドルーアの竜共は愚かな戦略会議を続けておる。多くの地域で開拓を行っているこの時期、この北の土地の反乱のみにこう手をこまねいては他地域の奴隷たちに示しがつかぬ、と混乱した会議が続いておる。それにお主等の反乱に喚起されて南方の開拓奴隷等や西方の弾圧されていた少数国家も反乱を起こしつつあるようだ。そうなれば此処のみに兵を集中させることは困難になるであらう。今少しの辛抱だ、アイオテよ。お主の後ろに道はない、お主の前にこそ道は出来るのだ」

「・・・ああ、俺たちには後退なんかねえ。前に進むだけだ」

二人は見詰め合い・・・真つ直ぐに言葉を交わす。互いに触れることはできない静かな空間。そこだけ時間が止まったように

「俺は前に進み続ける・・・でもお前は？お前も一緒に歩いてくれるんだろ？」

引き合う糸が切れる瞬間のような緊張感がその場に漂った

「・・・途中までは共に。しかし我の道はこの現世に肉体を持つお

主とは異なる道故に」

痛い――アイオテは体の何処かに鋭い痛みを感じた

「と、途中つて……一緒に居られねえのか？このまま……俺と……ずっと……」

痛い――アルテナは体の何処かに鋭い痛みを感じた

「不可能だ。この戦が終わるまでは共に在ろう。大地を正常に戻す者に力を授受することが我が存在理由……使命である。大地が正常に戻れば我はまた眠りにつかねばならぬ。本来我はこの現世に存在することを許されたエネルギー体ではない、からな……」

アイオテの痛みが伝染したのか、女神アルテナは自分の痛みに酷く困惑していた。意識体である時の自分に痛覚は無い筈であるというのに、自分は一体どうしたというのだろう

「お前が……人間だったら良かったのに、な……」

アイオテの紅く変化した瞳から、一筋の涙が流れ――硬い岩肌に吸い込まれていった

約束

「アイオテ！急ぎ北東の出口へと走れ！――」

南西に襲来した火竜の最後の一匹を撃破していたアイオテの頭の中に澄んだ声が響いた

「どうした？！」

どのような危機にも決して冷静さを失わなかった毅然とした声が、まるで慌てているような声音でアイオテの頭に鋭く響く。昼でも暗い森の中、北東の方角に走りながら内部の女神に問う

「――魔竜が……三十……以上！急ぐのだ！命の炎が次々と消えている！――」

「い、一体どうしたってんだよ！お前はいつだって……」

敵の襲来を完全に予測して来ただろう、とアイオテは尋ねようとして止まる。女神が――アルテナが、何時でだって毅然として冷静で、自信に満ちていたその声が……震えているように感じられたからであつた

「――お主の……お主の涙が……我を壊す――」

「な、なん……だって？」

――集中できぬ！まるで絵画を見るかのようにイメージしていた敵の姿が、霧に覆われたかのように見えぬのだ！お主の涙を見たあの瞬間から――

「やはり貴様か、アルテナ。貴様が奴隷共の裏に在たとはもう」

アルテナの混乱した声に気を取られていたアイオテが、不意に低い声がした方向を見ると其処には――三十匹以上の魔竜が木々を薙ぎ倒し、炎に巻かれ叫び声を上げて逃げ惑う仲間たちの姿があつた。絶対的な女神の混乱に戦場に辿り着いたことに気づかず――足元にはボロボロに欠けた剣が無数に落ちている
アイオテの胸から炎が噴出した！

「地竜オシリス！貴様のような最高位が何故このような反乱鎮圧部隊に赴く？！」

炎が人の形となり、女神アルテナは中心に居る地竜に叫ぶ。アイオテの足はガクガクと震え立っていられずに大地に崩れ落ちた。冷たい汗が滲んだ手で欠けた剣を拾う

「なんで・・・剣が・・・こんな・・・」

「アイオテ！あの地竜だ！地竜は大地のエネルギーを取り込む能力を持つ我的能力に酷似しておる！すなわち我が牙から削り取った刃は効かぬのだ！恐らくは奴が先鋒として出現し剣を破壊し、その後魔竜共が強襲したのだ！」

まるで地面から生えているかのように、巨大な体を岩のような皮膚で覆った地竜。その表面には傷一つ付いていない。黒焦げになった仲間たちの体の切れ端が次々と鈍い音を立て、まるで雨のように降ってくる。黒い雨だ。これは黒い雨・・・牙で噛み殺された人の一部が足元に転がってくる、見渡す限りの大地が赤黒い蛇に侵食されていく・・・！アイオテは自らの精神が、心が、スタスタに引き裂かれていく感覚に支配されていく・・・

「アイオテ！自分を保て！我だけを見ている！心を壊されるな！」
過酷な戦闘に明け暮れていたとはいえ、これ程の圧倒的な殺戮は見たことが無かったのだろう。自らの体を掻き抱き哀れな程に震え今にも事切れそうに俯くアイオテを、女神アルテナはその炎の腕で抱き締めた

「・・・あ・・・」

決して熱くはなく、寧ろ温かいと感じるその感触にアイオテはほんの少し自分を取り戻す

「そのような奴隷一人に血迷い自分を見失ったかアルテナ？飛竜族でありながらも大地と一体化出来得る紅竜にまで上り詰めた貴様程の戦士が、数百年前突然姿を消し・・・そのような下らぬ人間を守護しておるとは・・・惜しいぞ、アルテナ」

「メデイウスの軍事宰相である貴様が何故奴隷の反乱鎮圧などに乗

り出してくると聞いているのだ！下らぬのは貴様等の方だ！同じ意志ある存在全てを奴隷とし、自然の摂理から外れた進化を目的とする――貴様には大地が悲鳴を上げているのが聞こえぬのか！我にはこの大地から授かった使命がある！摂理を犯す者共を滅するといふ使命が！」

「それが我等竜族の前から姿を消した理由か？忠誠を誓った我等が王メデイウス様の前から姿を消した理由か？！大地の意識に取り込まれたか！下らん！大地の悲鳴なぞ聞こえぬわ！虫けらのような人間を同じ意志ある者だと？飛竜族最強の女戦士も堕ちたものだ！余りにも長く生き過ぎて精神退行を起したか――？まあ良い、昔から私は貴様と一度戦いたいと思っておった。精神が弱体化していてもその強さは劣ってはおらぬだろう？それこそが戦士というものだ！本能のみで戦い抜く戦士という存在だ！」

アルテナの体がゆっくりとアイオテから離れていく――アイオテはその離れた瞬間の寒さに、どうしようもない喪失感に思わず あ・
・ ・ と声を小さく上げた

「戦え！全てが千切れるまでこの私と――！」
ズズズズズ・ ・ ・ と地竜の巨大な体が大地に振動を与えながら這い出してくる

「・ ・ ・ アイオテ・ ・ ・」

美しいアルテナの体の輪郭が少しずつ不明瞭なものになっていき、
紅い塊に変化していくのをアイオテは見る――瞬間の、笑顔。微笑み

「今ならばはつきりと予知が・ ・ ・ いや、予言が出来る。明日になればドルーア帝国はお主等の独立を認める。お前が国王として独立宣言を行っている姿が見える・ ・ ・」

紅い塊は今や完全に巨大な紅い飛竜へと変化した

「その予言は・ ・ ・ 完全に的中するのだ。我があの地竜を打ち倒すことによつて！」

紅い飛竜――紅竜アルテナは空高く羽ばたこうとその紅い鋼の翼

をバサリと広げた。それは巨きく圧倒的な重量を持ち周囲の木々や黒焦げの死体を薙ぎ払う。その翼の軌道の形に森が開き、光り輝く満月が浮かぶ夜空が見えた

「ア・・・アルテナ！無茶だっ！あんな剣も通らない化け物に・・・それに魔竜も・・・」

二人の周囲は既に無数の魔竜が取り囲んでいる

「心配など無用だ。お主は我が護る」

アルテナが毅然とした声でそう言った瞬間、アイオテの体が炎に包まれた

「わっ・・・な、なにするんだ？！おい！やめろ！俺も戦う！お前一人を・・・愛してる女を一人で戦わせられるか！」

アイオテの視界は炎に遮られて除々に見えなくなっていく。その熱に意識が遠くなっていく・・・

「お主は国を創れ。獣にならずに済む自然の摂理に沿った国を・・・」

朦朧としてゆく意識の中、無数の魔竜に牙を立てられながらも地竜を組み敷く、月光に照らされた勇ましく美しい紅い飛竜をアイオテは見た

「お前が一緒になければ駄目だ！いやだ！お前が・・・傍に・・・居なければ」

消え行く意識に必死に抵抗してアイオテはただ、叫び続ける

そうか

お主がそう望むのならば

我はいつかお主の傍らに行こう
いつか

お主の肉体が滅んでも

お主の子孫の傍らに辿り着こう

お主の傍らに存在することのできる肉体を手に入れよう

アルテナの声は徐々に途切れ途切れになって行く。意識の糸が切れ
る瞬間アイオテは確かにその言葉を聞いた――

今	一つの	契約が	成さ	れた
我は	いつか	お主の	傍ら	に

建国

アイオテが意識を取り戻したその大地は、凄まじい殺戮の大地だった。夥しい数の、既に人間の形骸を保っていない仲間たちの死体、恐ろしい力でバラバラに引き裂かれたであろう三十体以上の魔竜の屍骸、そしてまるで岩の破片のように粉々になったあの地竜の屍骸が――見渡す限り朝の光に照らされていた

「・・・アル・・・テ・・・ナ・・・？」

一面大地は黒焦げになり、殆どの木々が薙ぎ倒されている樹海であった大地は、屍骸の盛り上がり起伏が手伝ってまるでなだらかな丘のようだ。アイオテはその見晴らしが良い死の丘を見回したがアルテナの――紅い飛竜の屍骸は無い――胸元の紅玉に触れても、少々の期待に反してそれは何の反応も起きなかった

「アルテナ・・・」

アイオテは地面に力無く崩れ落ちる

「なあ・・・お前生きてんだろ・・・？そくだ、お前が死ぬ訳ねえよ・・・」

死の丘の惨状にアルテナの炎のような美しさがフラッシュバックする

「・・・お前が・・・死ぬ訳ねえ・・・」

あのぞつとする程の美貌、鍛え抜かれた肢体、毅然とした自信に満ちた態度。そして――俺の涙に困惑したと言った時のあの――今にも泣き出してしまいそうな、消えてしまいそうな儚く潤んだ紅い瞳

「いつか・・・また会えるよな？俺の傍に来るって・・・お前そう言っただよな・・・？」

アイオテの一筋の涙が胸元の紅玉に落ちた。紅玉は微かに光ったよな――

「そつだろ？アルテナ――――！」

天を仰ぎ見るアイオテの慟哭が静寂の丘に響き渡った

「アイオテ……！」

丘の向こうから仲間たちが走ってきた。負傷の為洞窟に残っていた少数の仲間たちだった。彼らは歓声を上げながらアイオテに近づいて来た

「アイオテ！い、今……ドルーア帝国の使者が来て……」

周囲の惨状に驚き恐怖に震えながらも、仲間の一人はアイオテに興奮状態で話しかけた

「停戦を申し込むって……独立を認めるって……！」

アイオテは自らの耳を疑った。思わず聞き返す

「……なん……だと……？」

「俺たちは勝ったんだよ！」

アイオテの頭の中に聞こえない筈の女神の予言が響き渡る

「……明日になればドルーア帝国はお主等の独立を認める……」

「自由になったんだ！」

「……お主が国王として独立宣言を行っている姿が見える……」

「人間に戻るんだ！」

「……獣にならずに済む、万物の原理に沿った国を……」

「テメエら！」

俯いていたアイオテがガバツ！と凄い勢いで立ち上がった。今まで力尽きていたかのように大地に座り込んでいた彼のいきなりの変化に、男たちは呆然とする

「喜んでる暇なんかねえぞ！俺たちはもう二度と奴隷には戻らねえんだ！獣なんかに戻らねえ！その為に今何をすればいい？！もう女神様はいねえ……俺の特別な力はもう消えちまったんだ！」

何故……？という疑問は魂に響くような力強い勇者の声に掻き消され、男たちは朝の静寂の中でその魂の叫びを聞く

「自分の頭で考える！自分の足で立て！自分の手で運命を掴み取る
テメエ

んだ！」

その為に何を――徐々に一つの概念が全ての男達の心に浮かび始める

「人を大地とした――」

その場の男達の口々から勇者の名が密やかに発せられていく。その名を表す声はだんだんと大きくなり、一つのシュプレヒコールとなつて行く

「国を創るんだ！」

アイオテ！アイオテ！アイオテ！アイオテ！アイオテ――！

自由を導いた勇者の名が歓声を形作り、屍骸で埋め尽くされた死の丘に響き続けた――

教書まとめ

「マケドニア王国の現在」

以上が、マケドニア王国に残る女神アルテナ神話の一部です。この後解放された開拓奴隷達は自らが開拓した大地にマケドニア王国を誕生させ、その初代国王に反乱軍の実質的リーダーであったアイオテを迎えたのでした。この神話によると、女神アルテナの意識はアイオテの子孫に組み込まれ、その為マケドニア王族には飛竜を飼い慣らすなどの不思議な力があるということです。更にマケドニアが危機に陥ると、女神アルテナが王族の一人に受肉し国を救うという信仰が根強く残っているのはこの神話の為でしょう

ごく最近ではマケドニア前国王ミシエイル陛下の妹姫、ミネルバ王女がその受肉体の対象となったようです。これは何故かと言うと英雄戦争終結後、アカネイア王国を中心とする同盟軍首脳部はドルーア帝国と同盟を結んでいたマケドニア王国をグルニア王国同様、王位を剥奪した上属国とするという意見がありましたが、王族の一人であるミネルバ王女がアリティア王国マルス王子率いる同盟軍に中途参戦しその功績が認められ、その功績からマケドニア王国の王位を継承するという形で国を救ったからです。王女は暗黒戦争にも参戦し、神槍グラディウスを操る王女は勝利に非常に貢献しています

ミネルバ王女は国民に、女神アルテナの生まれ変わりと熱狂的に女王にと望まれましたが、その後病死し、現在マケドニア王国の女王はその妹姫であったマリア王女がその王位についています

以上

教書まとめ（後書き）

読んで下さってありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6586h/>

女神（ファイアーエムブレムのファンフィクション）

2010年10月10日15時28分発行